

カトリック 仙台教区報

2006年9月3日 No.171

発行
カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

平和への願いを行動で・・・ 全小教区で「平和を求めろミサ」

日本カトリック平和旬間の8月13日、仙台教区の小教区で「平和を求めろミサ」がささげられており、各小教区で練習を重ねられた。

この日のミサ式文は、教区の人権を考える委員会に制作が委ねられていた。同委員会は、『仙台中央地区お知らせ』で制作スタッフを募集し、これに呼んで参加した人々と共に「平和を求めろミサ」を準備していった。こうして作られた式文は、各小教区に送られ、それぞれの小教区に印刷配布、このミサに心を整えていった。

仙台中央地区では、午前10時から6教会の合同典礼として、信徒約400人が参加し、平賀徹夫司教の主司式で、5人の司祭と共に「平和を求めろミサ」が共同司式でささげられた。写真。



いた聖歌も、非常に美しく聖堂に響いた。

ミサの中で、平賀徹夫司教は次のように呼びかけた。

1981年、教皇ヨハネ・パウロ2世が来日し、東京、広島、長

崎を訪れました。特に、広島では、世界に向けて「広島平和アピール」を発表されました。「戦争は人間のしわざです。戦争は死そのものです」で始まるあの有名なメッセージです。

これを受けて、日本司教団は、1982年、8月6日から終戦記念日の8月15日までを「日本カトリック平和旬間」と決めました。

私達信者は、平和の子らと呼ばれたのであり、平和のために働くように求められています。その平和を求めろる意志を行動で表すことです。

キリストこそ私達の平和のもとです。平和のために働くためにはキリストと結ばれている必要があります。

「友のためにいのちを与えるほど大きな愛はない」(ヨハネ15・13)と教えられたキリストの愛は、最後の晩餐の記念として私達に残してくださいました。ミサを通してキリストの愛に結ばれて、平和のために働く力と喜びを得て、平和のために働くものとなりましょう。

塩と光

イエスはペトロに向かって、「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てよ」(マタイ16・18)と、宣言なさいました。

さらに、教会は「キリストの体であり、その頭(かしら)は、キリストご自身です」(エフェソ4・12・15参照)。第二バチカン公会議は、聖書に基づいて教会を「神の民」と表現しました(『教会憲章』第二章参照)。教会はキリストの祭司職、預言職、王職にあずかることができるのです。「あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です」(ペトロ1・2・9)。まず、この祭司職を忠実に生きるために、典礼活動を充実させることが第一の課題です。さらに、信徒の祭司職は、自分の仕事、家庭生活、日々の労苦、そして世そのものを天の御父にささげることです(『教会憲章』11項参照)。預言職を生きたるために、世の終わりにまでわたしたちと共におられる主に協力して全世界の人々に、福音を宣べ伝えます(マルコ16・15参照)。また、王職を実践するために、すべての兄弟、特にイエスの兄弟である貧しい人々に愛と正義をもって仕えます。

多国籍の人々と共に生きるため 第34回カトリック宮城県大会開かれる

大雨の降る7月2日、仙台白百合学園中学・高等学校のロザリオのマリア聖堂で、第34回「カトリック宮城県大会」が開催され、約400人の信徒が参加した。

今回のテーマは、「共に生きる 豊かな交わりをめざして」。特に外国籍信徒の増加が予想される現在、自教区を「多国籍教会」ととらえ、その歩みを続けているさいたま教区の「オープンハウス」スタッフを迎え、その取り組みの紹介と、協働宣教司牧の現状についての報告とミサを中心に午前10時から午後3時まで共に学び、祈り合った。

宮城県信徒連絡協議会会長・佐々木由美氏の開会挨拶の後、「オープンハウススタッフ」のSr.小塚恵子（援助修道会）とフィリピン人信徒宣教者のネディ・コード

説明した。さいたま教区には、日本人信徒の約6倍の外国籍信徒がいる。国籍としては、ブラジル、フィリピン、ペルー、ベトナムなどから来ている人々である。

オープンハウスは、1994年コードさんが来日し、教区を形成している4県の中心である小山市に開設された。当初はハウスの存在を知らせる活動をしてきたが、その存在が知られるようになると、人権の問題に関わらざるを得なくなつた。1年間で約200ケースを取り扱ったこともある。

1995年に、教会が力を入れたことは、ボランティア養成である。

宣教司牧の基本方針策定にむけて
司教 マルチノ 平賀 徹夫
仙台教区では教区の宣教司牧のビジョンとして固まったものをまだ持っていません。これまで、教区宣教司牧を考える会で、「教区の5年後（将来）を見据えた宣教司牧のあり方」を検討してきました。そして、人的な面からも経済的な面からも、今までの形のままあり続けることはできないと共通に認識できましたが、具体的に何をどうしたらよいかまとめるまでにいたっておらず、検討はこれからも続きます。

これと平行して、詳しいことは略しますが、「仙台・塩釜地区（仙台圏）の教会はどうあったら良いかアイデアを提案してほしい」ということで、仙塩地区の信徒・司祭・修道者の中から教区顧問会で推薦された方々に「プロジェクトチーム」になっていただき、その労をお願いしていました。そして去る7月19日、その大変な労作である答申が司教に提出されました。広範かつ詳細な資料も添付されていて、今後の教区、特に仙台圏を考える上で、大変に貴重な材料となるものです。

更にこれと平行する形ですが、7月11日の司祭評議会において、「教区の宣教司牧の基本方針を論議するための具体案を提示する」ことを目的とする特別小委員会を立ち上げる、と決定しました。5人の司祭による構成、任期は1年間、と考えています。

教区としてこれから、司祭評議会が中心となって、上のプロジェクトチームの答申、そしてこの小委員会からの具体案を受け止め、教区宣教司牧評議会とも連携しながら、宣教司牧の基本方針について論議し、固めていくことになります。



さいたま教区事務局長 Sr.小塚さん コドクさん

弁護士もいない。話を聞き、できることをしていこうとした。現在は、外国籍の子どもたちへの信仰教育を大切にしており、言葉別にミサ式次第から始まって、初聖体、堅信についてのテキストも作成している。

私たちは、ストレスの多い仕事の中で、お互いが支え合っている大切なことは、日本人についても外国籍の人々についても、理解することである。

第二講話は、さいたま教区事務局長である矢吹貞夫助祭から、「協働宣教司牧」について、概略以下のような話がなされた。

1996年、教区は「多国籍教会」ということを打ち出した。それは、「日本人も、他国籍の人も同じ寄留の民である」との考えからで、これを機にオープンハウスは、言語別司牧活動に重点を移した。

1997年、オープンハウスを小山市から、教区事務所内に移転させたことで、同ハウスの活動が司祭たちの目に留まるようになり、司祭たちの間から「オープンハウスとは何か」という疑問が出されるようになった。

これをきっかけにして、年一度の司祭大会に参加し、現状を伝えることができるようになった。2002年から、リーダー養成に力を入れている。特に、人権と司牧の問題について養成した。スタッフにできること、できないことをはっきりさせた。お金はない

これをきつかけにして、年一度の司祭大会に参加し、現状を伝えることができるようになった。2002年から、リーダー養成に力を入れている。特に、人権と司牧の問題について養成した。スタッフにできること、できないことをはっきりさせた。お金はない

協働宣教司牧を打ち出したとき、谷大司教はその前提として「協働宣教司牧は、小教区の統廃合を考えるのではない。必要な所には、小教区共同体を増やしていくことも視野に入れる」のだと説明した。

三つのポイントがある。協働宣
教司牧は、すでに始まっている

二ツが多様化し、対応の多様
化が迫られている現在、司祭が一
国一城の主であるという時代は
終わった。信徒と司祭が相互に信
頼し、視野を外に向け、
教会が救いのしるしと
ならなければならない。

豊かな共同体をめざ
す ミサを中心とする
共同体であるが、その土
台は共同体としての交
わりであり、信仰生活で
ある。この土台がしっか
りしていなければ、宣教
司牧はできない。そのため
に、上意下達の形では
なく、一人一人のタレン



以上のような
なことを行っ
ているが、私
たちが実感し
ているのは、
一緒に皆でや
っていくとき
聖霊が働くこ
うであること
である。
昼食時には
中世教会音楽
の合唱があり、

ト、違いを活かした隔ての壁を壊
した協働が必要。
面を取り組む 教区をプロ
ツクに分け、ブロック内の全体を
見ながら宣教司牧のプログラム
を作り、実践する。

参加者を喜ばせた。
1時半からは、平賀徹夫司教の
主司式で共同ミサがささげられ
た。スペイン語やタガログ語での
聖書朗読や、多言語での共同祈願
などがあり、多国籍教会として生
きようとする仙台教区の姿勢が
見られた。

元寺小路教会の保護の聖人で
ある聖ペトロ聖パウロ使徒の祭
日と仙台教区司教座教会献堂記
念日のミサとお祝いが、6月25
日元寺小路教会
で行われた。本
来の祭日は6月
29日だが、ミサ
は祭日の典礼に変更して平賀司
教が司式された。

司教座聖堂70周年を祝う

平賀司教は説教の中で、次のよ
うに話された。
「ペトロとパウロは教会の中
心となった使徒です。教会の歴史
は殉教が大きな種になっていま
す。教会を最初に建ててくださっ
た方ご自身が、いわば最初の殉教
者です。ご自分の命を人類の救い
のためにすべて投げ出してくだ
さった、それほどまでに私たちに
大事に思ってくださいました。私
たちも毎日殉教の精神を持って
生きていくようにしましょう。」

ミサの後、仙台教区の司教座聖
堂70周年のお祝いをおこなった。
1936年6月29日に函館から
仙台に司教座が移され、仙台教
区が誕生して今年で70年になる。
お祝いの会の中では、仙台教区と元
寺小路教会の歴史を振り返りなが
ら、1936年の初代ルミュー司

典礼の霊性を深める

司教神学顧問 佐々木 博

「感謝と賛美」

感謝とは、神の賜物で満たさ
れ、キリストにおいて完全に与
えられる神の恵みに対する人間
の応答です。

賛美も、恵みの源である神と
そのわざをほめたたえること
です。ですから、感謝も賛美も
神の偉大さをたたえ、神に栄光
を帰すことなので、一体となる
行為です。「優れた会衆の中で
あなたに感謝をささげ 偉大な
民の中であなたを賛美できます
よ」(詩編35・18)。

教会は、聖書全体を反映して
いる詩編を、キリストの福音と
その生涯の光をあてて理解し、
典礼に用いて来しました。そもそ
も詩編は、イスラエルの最も古
い時代からささげられて来た神
への賛美と感謝の祈りでありま
す。そして、この賛美こそが、
神の民イスラエルの礼拝の特徴
となりました。つまり、神の救
いのみわざに感動したとき、神
への賛美となったのでありま
す。

新約における典礼の中心であ
るミサは、逾越祭の伝統の上に
制定された「感謝の祭儀」であ

ります。ですから、初代教会で
は、ミサのことをギリシャ語で
感謝を表す「エウカリスチア」
と呼んでいました。これは今日
でも、ミサの全世界共通の呼び
名となっております。このよう
に、感謝と賛美こそが典礼の霊
性の土台といえます。です
から、典礼の主体である信仰共
同体は、いつも喜び、絶えず祈
り、どんなことにも感謝するよ
う励みます(テサロニケー5・16
参照)。また、日々の生活の
ただ中でも神に感謝し賛美しま
す。



戦前の大聖堂 1936年頃



教の叙階式「写真下2枚」や戦前戦
後の大聖堂の写真を見ながら、
仙台教区の信仰の歴史
を思い起こし、宣教への思いを新
たにした。
(今田潔)

祝 グアダルペ宣教会 日本宣教 50 周年

グアダルペの聖母マリア



(グアダルペ宣教会の守護者)
メキシコという国は、まるで万華鏡のように、文化も言語も異なるいろいろな民族が集まった国である。それを一つにまとめているのがグアダルペの聖母マリアである。

豊かな人の家にも、貧しい人の家にも、学問のある人の家、無学な人の家、どの家に行ってもグアダルペの聖母マリアの像が飾られている。

グアダルペの聖母マリアは、1531年、先住民のような顔で、原住民の話すことばで話しながら、ホアン・ディエゴという名の貧しいインディオの前に現れた。そして、征服され、苦しみを味わっている民に希望を与えるメッセージを伝えた。彼を司教のところに遣わし、彼女の愛を示すために聖堂を建てるよう伝えさせた。

スペイン人の司教はインディオのことばを信用せず、証拠を示すように求めた。聖母は、ディエゴに数本のバラの花を渡し、彼はそれをサボテンの繊維で出来た粗末なマントにくるんで司教のところに持っていった。彼がこの花を司教に見せようとした時、花を包んだマントに、聖母の姿が鮮やかに描かれていた。

司教は、ディエゴのことばが本当であることを悟り、聖堂を建てた。

聖母の姿が描かれたマントは、473年たった現在でも、メキシコ・シティの聖堂の中に、現れた時と同じ場所に、そのときのままの形で見る事ができる。

メキシコの司教団は、この外国宣教会の設立にあたり、グアダルペの聖母マリアをその保護者とたのみ、グアダルペ宣教会と名付けた。

(グアダルペ宣教会パンフレットより抜粋)

「あなたは、自分の小教区にどんな夢を持っていまですか。自分の属する小教区がどんな小教区であつたらよいかを考え、その

あなた方とともにいる。

共同祈願では、会津地区の各

会場から拍手がわきあがった。

来日50周年記念行事は、仙台

平賀司教は、説教で、
「あなたは、自分の小教区にどんな夢を持っていまですか。自分の属する小教区がどんな小教区であつたらよいかを考え、その

教会は旅する神の民。『あなた

信者全員のものです。』

その後、同宣教会の50年の歴史がスライドで紹介されると、なつかしい神父様方の写真に

音宣教にたずさわっている。

「あなたは、自分の小教区にどんな夢を持っていまですか。自分の属する小教区がどんな小教区であつたらよいかを考え、その

教会は司祭の教会ではなく、

信者全員のものです。』

その後、同宣教会の50年の歴史がスライドで紹介されると、なつかしい神父様方の写真に

音宣教にたずさわっている。

グアダルペ宣教会が日本での宣教を始めて50年になることを祝う記念ミサが8月11日(金)、会津若松ザベリオ学園講堂で行われた。
ミサは、平賀徹夫司教主司式により、同宣教会司祭や仙台教区司祭など17名による共同司式でさげられた「写真」。

50年前、夢とエネルギーを持つて宣教のために来られた宣教師の方々によって、小教区は活気に満ちていたことでした。

今、私たちの教会はどうなっているのでしょうか。

やっただイエスのことばに信頼を持って応えていくためにこの50周年を祝いましょう。」と話された。

テトラル、9月8日には、京都



教会代表者らが、宣教会司祭の活動に対して感謝の祈りをささげた。

グアダルペ宣教会は、外国への宣教を目的に、1949年に、メキシコカトリック司教団によって創立され、メキシコの信徒たちの支援に支えられている。1956年(昭和31年)8月16日、最初の3人の宣教師が来日し、小林有方司教の招聘に応じて1958年(昭和33年)福島県会津地区で宣教を始めた。

祝賀会では、グアダルペ宣教会総長ホアン・ホセ・ルナ師「写真」が、宣教師たちを温かく迎えてくれた仙台教区と信徒たちに感謝の言葉を述べ、日本管区長ホセ・モンロイ師は、「50年の経験を生かして、新しい50年をはじめます。皆様のお祈りをお願いします。」と力強く挨拶した。

その後、同宣教会の50年の歴史がスライドで紹介されると、なつかしい神父様方の写真に会場から拍手がわきあがった。



来日50周年記念行事は、仙台教区以外に、8月5日に東京力テトラル、9月8日には、京都

シュトルム神父遺作展

岩手県二戸市で開催

7月26日(水)～30日(日)、

岩手県二戸市民文化会館展示室において、2年前に帰天されたベトレヘム外国宣教会のゲオルグ・シュトルム神父の遺作展が行われ、同神父を慕う教区内の信者と二戸市民の多くの人々が詰めかけた。

「G・シュトルム神父遺作展」と題するこの展覧会は、二戸市主催、ベトレヘム外国宣教会本部、岩手日報社ほかマスコミ2社と2団体が後援して開催された。

シュトルム神父は、生前、植樹や、木彫、絵画、作曲、またその出版活動などをとおして宣教活動をする

ことで、多くの人に知られていた。2004年7月、89歳で亡くなられたシュトルム神父の描いた絵画など遺作1762

点を、同神父所属のベトレヘム外国宣教会本部が、二戸市に寄贈した。

今回、その遺作の整理保存作業が終わったことから、7月29日の命日を中心に、植物や風景の絵画など百点が厳選され、展覧会が開催されたもの。

シュトルム神父は、1959年以来その最期まで、カトリック二戸教会の主任司祭として、その宣教師としての生活を全うした。シュトルム神父をよく知る人々は、彼のことを「東北のフランシスコ」と呼ぶ。それは彼の清貧の生活と動植物を愛する心からである。特記すべきことは、彼の20年におよぶ植樹への取り組みであろう。教会の裏庭で、種から育てた苗木を、市の許可のもと、伐採後の山や市民の森、野球場周辺などに一人一本一本植え続けた。その数



は50種2000本におよぶ。二戸市を愛し、古い民家をそのまま教会とし、当時の管区長が建物を建て替えようと言ったとき、「私が自分を家に合わせるので、このままで」と答えたように、二戸周辺の古い民家を愛し、水彩画に描いていった。神父の描いた多くの絵の中には、今は希少植物となった貴重な花や草が残されている。



かやぶきのある風景

シュトルム神父の遺作展であるが、これは、岩手県を宣教司牧してきたベトレヘム会宣教師一人一人の働き、奉仕を表すものでもある。

(Sr.米竹佳子)

修道誓願記念日を迎えて

コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会

Sr. 斎藤トミ子とSr.尾形キミ

は、コングレガシオン・ド・ノートルダム

の戦中を生き抜いた、日本人会員第1号。

Sr. 斎藤は語る。「10歳で受洗した私は、プレゼントにもらったリジュアの聖テレジアの本から、どうしても聖人になりたいと思い、修道生活を熱望しました。家から離れるために、八戸教会で働いていた時に出会ったのが、ノートルダムでした。これが、私にとつての、神様の導きだったわけです。神様の導きは、本当に不思議ですが、確かです。今もって、自分の歩みはカメさんのようだと感じますが、『それ、がんばれ、がんばれ』と旗を持って待っていてくださるイエス様に、早く喜

んでいただけるよう、どうぞ引き続きお祈りください。

Sr. 尾形は、「戦時中、カナダ人のシスターたちは敵国人として、会津若松に軟禁されてい

ました。食糧事情が非常に悪く、私は彼らのために福島の実家から食べ物をもたらして来ることがありました。ある日、卵をよく産む鶏を、母が一羽くれたので、箱に入れて汽車で持ち帰りました。途中、闇物資検査のため警官が乗り込んで来たとき、私の座席の下で、鶏がコッコッコと鳴くじやありませんか。本当にヒヤヒヤしたものです。」

Sr. 江川幸子は、桜の聖母学院小学校で教えている。「ダイヤモンド祝のシスターたちと比べると、銀祝はまるでヒヨコみたいかも知れませんが、今日までの道は、途中で健康を害したこともあり、必ずしも常に平坦ではありませんでした。でも、その凸凹のすべてが、神様の深いお計らいだったと、心から確信しています。」(Sr.今泉ヒナ子)

(関連記事7ページ)

各地から

岩手 志家教会

志家教会創立50周年記念式典
 1956年(昭和31年)7月1日に四ツ家教会から分かれ150名の所帯でスタートした志家教会は半世紀の歳月を経て、去る6月24日、教会創立50周年記念式典を行いました。記念ミサには県内兄弟教会の皆様や、東京など県外在住の当教会OB・OGもこられ聖堂最大収容人数に近い147名の信徒の方に参加をいただきました。写真。

平賀司教様はじめ県内外の8名の司祭により厳かにミサが執り行われました。司教様の説教では、教皇様の回勅「神は愛(25・a)より、教会の本質はその三つの務めによって表されます。すなわち、神のこぼを告げ知らせること(宣教)、秘蹟を祝うこと(典礼)、そして愛の奉仕を行うこと(奉仕)です。」(使徒行録2・42参照)この3つが絶対必要であると説かれ、改めて自分の信仰を省みられた方も多かったのではないかと思えます。

147名の大合唱による聖歌が記念ミサの感動をさらにたかめてくれました。引き続き別会場で行われた祝賀会では、創立



よう歩んでまいりたいと思えます。(飯塚豊)

宮城 一本杉教会
 福音宣教50周年記念
 一本杉教会は、7月17日(月・海の日)に、福音宣教50周年の記念行事を行った。

これは、1956年7月に、当時の仙台教区長小林有方司教の要請を受けて、一本杉の地に新たな小教区を創設するため、ケベック外国宣教会から、ジャン・ルイ・フォーレ神父が派遣され、当時開校されたばかりの聖ウルスラ学院中等学校の一室を借り、ミサをささげ、福音宣教を開始したことを起源としている。

当日10時から行われた記念ミサは、平賀徹夫司教による主司式で、13名の司祭が共同司式に加わった。当教会の信徒に加えて、かつて当教会に所属していた方々、仙台教区内からお祝に参加された方々など200余名が聖堂を埋め尽くした。

続いて行われた祝賀会では、カナダから駆けつけた初代主任司祭フォーレ神父と、第6代目の主任司祭、ジャン・シャルロワゼール神父、当教会で受洗しフォーレ神父と共に福音宣教に活躍していた土井勝吾神父などを囲んで思い出話に花

を咲かせ、余興に「青葉城恋歌」が飛び出すなど和やかな時を過ごした。写真。

50年祭を行うにあたり、2年前から準備委員会を立ち上げて計画を練ったが、ただ一過性のお祭りに終わらないようにと4つの目標を定め、共同体のメンバーが一人一役、全員参加で取り組むことにした。4つの目標は「信徒としての霊性を高める 教会共同体の一致を深める 福音宣教の拠点となる教会共同体づくりを目指す 仙台中央地区他教会との連携を深める」である。

一本杉教会の記念誌に寄せられた原稿を読むと、歴史の中で、初期の信徒の方々が、主任司祭を中心に福音宣教にいか

がよくわかる。歴史に学び、新たな一歩を踏み出すことが今の私達の課題である。4つの目標を、今後も私達の教会の目標として努力していきたい。

福島 CND修道会
 修道誓願記念日
 福島市のコングレガシオン・ド・ノートルダム修道院は、去る6月24日、3名のシスターの修道誓願宣立記念日を祝つた。この日の喜びに輝いたのは、シスター・アンナ斎藤トミ子(誓願60年、気仙沼出身)、シスター・アンジェリーヌ尾形キミ(60年、福島松木町出身)、シスター・マリア・セシリア江川幸子(25年、福島松木町出身)。福島市花園町の同会修道院で、当日午後1時半から捧げられたミサは、梅津明生神父、チェスワフ・フォリシユ神父、イエジ・ウイドムスキー神父による司式で、100名を超える親族・友人で賑わった。



記念のために当教会信徒作曲の「祝典歌」のチェロ演奏に続き、司教様、ベトレヘム外国宣教会ツゲル地区長の祝辞、土井勝吾神父様の挨拶の後、和やかな雰囲気が始まりました。祝宴中、弦楽カルテットの演奏があり、会場内にはそば等の屋台も並び、国際色豊かな教会らしく南米コロンビアの民族舞踊、飛び入りの土井神父様の「短縮版?さんさ時雨」や「大漁唄い込み」も飛び出したりで、大幅に時間を超過しお開きとなりました。

キリストの教えを広めるべく、50年間神と共に歩んでこられた歴代司祭、先輩信徒そして何よりも「神様のお恵み」に感謝し、今後志家共同体が100周年150周年を迎えることが出来る

に熱心に取り組んでいたか



祝賀会で歌う侍者会のメンバー

活動紹介

「ともにカダル集い」

この集いは、3年前に小教区の活性化と次代を担う若い信徒の交流を目的に、また、信者でなくとも聖書に興味を持っている方々をも対象に、「ともに聖書を読む集い」として一泊二日の日程で始まりました。

聖ゲオルギオのフランシスコ修道会と聖母被昇天修道会の共催で、第1回は溝部司教を指導司祭に迎えて開催されました。途中から名称を「ともにカダル集い」に改め、年4回のペースで開催され、今年の7月

私の気分転換

原町教会 若原裕代

1ヶ月ほど前から、明け方激しいしびれを右手に感じて、その痛さに目覚めてしまふことが毎日続いた。頸椎異常かな？と整体に行ってみたが治らず、整形外科にかかったら「手根管症候群」といって、手を使い過ぎることによって手首の神経が圧迫され、しびれむくみなどの症状が起きるのだと言われた。ひどくなるとう手術も必要らしい。手の使い過ぎ・・・普通の主婦の私が手を使うといえは趣

で11回目を迎えました。「カダル」とは津軽弁で「語る」の訛ですが、仲間に入るという意味もあります。

参加人数は、このところ10人前後ですが、八戸や弘前からの



味・・・、テニス、手芸、パソコン・・・どの趣味も楽しく大好き、これが私の気分転換と思っていた。しびれの治療に毎夜簡易ギプスをつけて寝るのだが、この仰々しい自分の手を眺めながら、これって、「気分転換」のやり過ぎってことかなあ・・・と笑ってしまふ。まるで気分転換の合間に日常生活をしていくみたいだ。それでも止めようとしなないのは、私にとってこれらの気分転換が、いかにストレス発散になって私を生き返らせてくれるか、分かっているからだろう。



参加者もあり毎回新しい出会いと発見があります。日ごろ遠ざかりがちな聖書にじっくりと触れ、ともに分かち合い、語り、神父様を囲んでいるいろいろなお話も聞くことができ、充実した時間を過ごすことができそうです。シスター手作りのおやつも魅力です。

(青森本町教会・張間成就)

修道院紹介

聖ウルスラ修道会一本杉修道院

世界で最も早く女子教育を目的として創立された聖ウルスラ修道会は、カナダを経て1936年に来日しました。戦争の混乱の時期を経て、1950年に小学校が木ノ下に創立され、以後、教育使徒職として仙台と八戸に根を下ろしてきました。

一本杉修道院は本部として、東京、仙台、八戸、のそれぞれの修道院同志の交流と結び役を果たしています。

現在のメンバーは23名で、二つのグループに分かれています。本部所属は17名ですが、4階には、療養や介護を必要とする姉妹のためのコミノテがあ



り、6名が所属しています。学校に勤めている3名のほ

かは、宗教の勉強に来る方や、いろいろの相談にお見えになる方々に応じたり、院内の細かい仕事、カナダ本部ほか、その他の国々(台湾、タイ、インドネシア、フィリピン、ローマ)のウルスラ会との連絡、交流などに働いています。

また、信徒の方12名ほどが、アソシエイト(賛助会員)として聖ウルスラ修道会の霊性を分かち合ったり、奉仕活動に参加したりしています。(Sr.堀江茂子)

新刊案内

回勅 『神は愛』

著者 教皇ベネディクト16世/訳者 カトリック中央協議会 司教協議会秘書室研究企画/発行 カトリック中央協議会/定価 800円+税

教皇ベネディクト16世が就任されたのは2005年4月24日。この就任の母の説教で、「私たちがあがめるのは、神の愛」と話されて以来、折あるごとに神の愛について触れられていたが、教皇就任後、初の回勅として本書『神は愛』を今年の1月25日に発表された。

本書は日本語訳され、出版されたのは7月12日であるが、それ以前に立正司教様は、仙道連合婦人会「あけの星会」の総会において本書の内容を紹介され、「ぜひ出版されたら読んでください」と推奨されたもの。百ページにも満たない薄い本であるが内容は濃く、「愛の神学」が展開されている。

本書は、部々分かれ、第一部は、神の愛と人間の愛の関係について、第二部は、愛の共同体としての教会が行う愛の実践について述べている。

教皇は第一部において、「現代の肉體質美は、まやかしの美」で、人間の身体を、「単なる生物学的分野」に、追いやられるのだと鋭く指摘する。人間の愛、「エロス」と信仰に基づく愛、「アガペー」は、究極的には一つの現実であると述べる。

第三部は、教会の愛の奉仕、愛の実践、秘跡の執行、みことばの告知と並ぶ、教会の基本的活動である述べ、歴史を踏まえながら、現代、私たちが、愛の実践にどのようにかかわるべきかを教えている。結んで、教皇は愛の実践を「た模範的な聖人として、ツールの聖マルチノをまます取り上げておられることを絶えず心がけ加えておく。

